

もしこの世に自分一人しか いなくなったら（ぼっち4）

花見行脚を終えてからは、生きることに積極的になってきた。

昔は冗談で「死ぬまで生きる」などと軽口を叩いていた。

今となっては、このまま誰とも出会わなくとも、何もひとりぼっちを否定する証拠が全く見つからなくても、生きる希望がなくても、生きる意味さえも見つからなくても、兎にも角にも、真摯に「生ある限り生きる」と考えるようになった。

花見行脚の少し前までは、朝目覚めて「ああ。生きてるのか。生きてなくても良かったのにと死ぬ勇気さえもなく、ただただ早く、このどうしようもない現実から逃避したい」と思っているだけで、積極的に何かを行って現実逃避することもなく、惰性的にグダグダと悲壮感のぬるま湯に浸かって、同じところをグルグル回っているだけであった。

少しだけ、健康に留意するようになってきた。何を以って今健康であるかはもう診断する・される術はない。自分自身の「痛い」「辛い」が診断のパロメータであり、もうそれしかない。精神的な「痛い」「辛い」は花見行脚の頃からは、幾分薄れてきたが、日によって波はある。それでも「生き抜く」との生命力がそれに勝る。

幸い精神的な「痛い」「辛い」以外の身体的・物理的な「痛い」「辛い」はないし、当面「痛い」「辛い」が出そうにもないが、もし何かが見れると、精神的にも「痛い」「辛い」が助長され、身体的・物理的には些細な事でも「生き抜く」ことが不可能となる可能性は非常に大きい。何も自分では治療できないから。

そうならない為に何か出来ることはないか。そうだ。「予防措置」か。

ひとりぼっちになる前のようなことはできないにしろ、口の中の衛生と身体的な衛生には神経を使う様にしている。歯磨きと入浴となるがプリミティブな方式となる。文化的な何かはない。「飲食」「睡眠」「排泄」「生き抜くための労働」が源泉である。

ある日、ふと思った。今、原子力発電所はどうなっているのか、とても不安になってきた。健康に留意するも、何も情報がない無い中、あれから知らずの内に健康を害する環境に変化しているかもしれない。思い出すのは辛い、電気が止まったのは事実だから。

「生き抜くための労働」生き抜く為に何かを探し出したり、出来る範疇で何かを創造することが主な内容である。前者はひとりぼっちになる以前には窃盗と同一の行動を何の躊躇もなく実施し続けることである。「お金」はもう何の意味や役割を果たしていない。

そうして、放射能測定器があるであろう、役所の中を駆けずり回り、見つけ出した。

家電量販店で電池を入れ起動させた。数字が表示されたが、これが高いのか、低いのかは判らない。今度は、それがどの程度なのかの情報を探し出すのが労働となる。